

東杉齋
壽天夫



連歲高

孫鶴友送

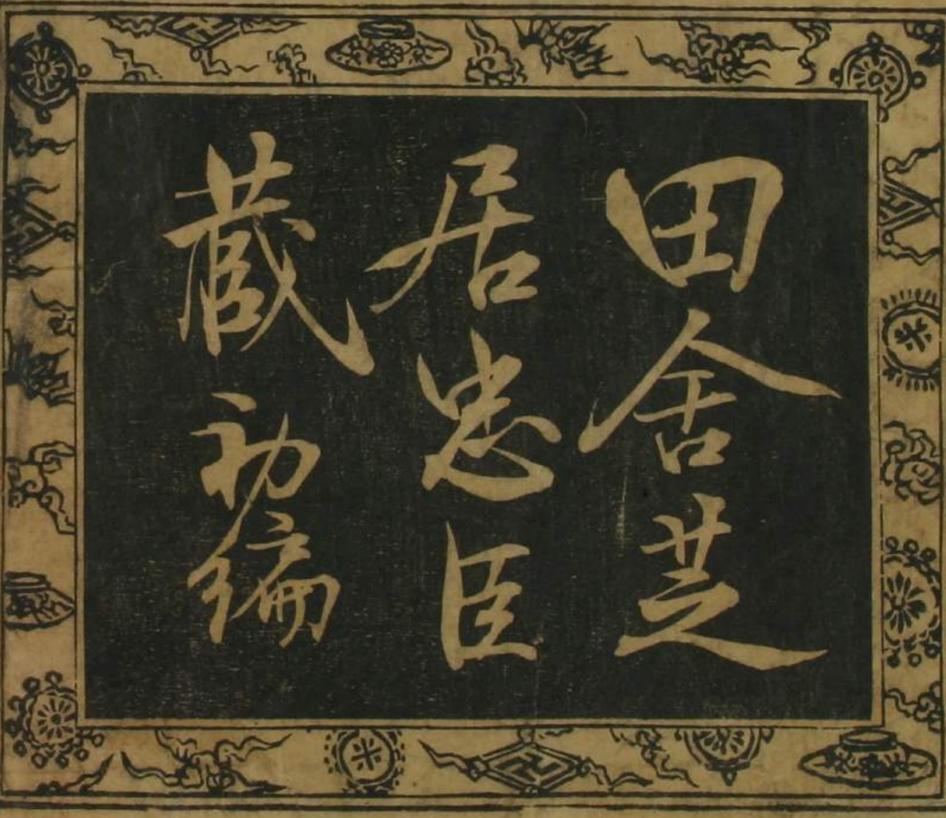
玉堂



門 13
1896
12



三馬新編



朝葉房夢羅久を往管小比なび世に名さし露の五郎兵衛鹿の武
左衛門或は休慶或は伽羅小左衛門又ハ伽羅四郎齋が屬小齋
落話の達者なり。されゆゑ今 江戸小おつゝ其名最高。彼の
常に説く所の笑話と上梓抄にて成る所を稿に於て間を不得と
し事と果さず。頃日余が庵と訪の日。這撰史と懐めて来て余
み投して曰。這ハ是吾生平演お所の鄙句攔話なり。これ文拙く
趣向太短。先生吾為小増補あり。木以上せたまは。余が僥
倖何ぞうされし。ち且忠臣蔵第二回の一勸余の癡愚なる
戲作と纏ぎ。先生例の滑稽と以て第四回より第十一回まで述

別と 万象 亭著 作乃 田舎 芝居 乃狂 言之 此書 舎の 地狂 言の 頗暴
 作わらば看官れ願と解しめ發客の米器と潤さく余がのく
 你言と休ふ夫田舎芝居の小冊ハ古人月池乃萬象亭為輕先
 生乃著述わらば一僊鶴本小とわらば
 仙鶴堂ハ通油町小住書林
 鶴屋喜右衛門と云ふ万象著作
 の田舎芝居ハ仙 万象亭ハ古人福内鬼外の門人なり狂歌の名ハ竹杖為輕と云ふ
 雀堂の上梓なり 戲名天竺浪人或ハ下界の隱士天竺老人といふ近年七師の戲
 名と繼て風來山人二世福内鬼外と更ハ小説稗史の著作若手卷大ハ世小行り先生
 醫と業として蘭学小委し著作ハ一時の漫戲といふと元祖福内鬼外の風韻ハ万象
 先生ハ遺言ぬおれと世ハ平賀風と稱と先生ハ余と戲作の友ハ文化七年庚午十二月
 四日小物故と可惜其初号森羅万象の名ハ門人七珍石宝ハ譲係便ち二世
 森羅亭万象當時俳 其后田舎芝居の冊子許多ありといふも
 諧歌の判者これなり 萬象先醒ハ糟粕を嘗味のいふと秀作といふかの紙と云ふ
 今 這忠臣蔵の小冊と伯仲の間あり假令編と著と云ふ
 勞し功なり業ふはべいと再四五異見を加不夢羅久更
 路

不昔仍く増補ハ拙筆と揮く發客雙鶴堂と與ふ

文化八年辛未冬十二月上浣本町延壽丹藥店より刊す
 玉顏ハ奇藥江戸乃水製法の閒筆を採録

江戸前ハ市隱 式亭三馬戲撰

小寺 玉顔文庫





談洲樓馬茂
兩國柵橋大の
樓上小おのく柱文
披講の体



よびてくたすをはせがらん

の更まの亭



あんのこんが
 けさる助が
 うでつて
 あつて
 うが
 むん

司かん平
 けさる助が
 うでつて
 あつて
 うが
 むん



田舎居
 地狂言
 忠臣蔵
 阿軽
 三人
 長平
 一人を
 競
 圖

司かん平
 けさる助が
 うでつて
 あつて
 うが
 むん

田舎居
 地狂言
 忠臣蔵
 阿軽
 三人
 長平
 一人を
 競
 圖

田舎の女房



けん十さア
 らうていア
 きんが
 ぶらあ

けん
 らうてい
 きんが
 ぶらあ



けん
 らうてい
 きんが
 ぶらあ
 けん
 らうてい
 きんが
 ぶらあ

けん
 らうてい
 きんが
 ぶらあ

扱あつかつる。別わか儀ぎでも来き中ちゆう一いつ孫そん人にんがけ交まじ不ふ坊ぼうある。若わか者しや等ら。
 此こゝ大おほ切きのお娘むすめ子ことあつあつくさくさ。室むろりり一いつ後ごぐぐええのの中ちゆう小せう
 ついて。さうくとくもロイ利りさげげが。あつあつぢやや。大おほ屋や沙さ法はふ不ふ
 ともささとと言いららししかかるるげげがが娘むすめとあつあつくさくさとと持もちち
 ても。あん中ちゆうりり美み目めでもああんんぢぢッッササ。危こ角かく男おとこアア敵てきで持もちちて。
 餘あまアアととききでりりてとむむじじのの人ひとの教しやうああもああるるああるる。ああんんでも
 石い垣けんへ雞と卵たまごとひひららととややううふふ。碎くだけけささううせせんん。ハハテテどどううししるる
 りりんんどど。吹あくくの減へる物ものでももごごんん孫そん人にん。どどううも堪かん忍にんががはは悪あくかん
 づづののがが。ササそそここがが。そのの。堪かん忍にんののるる。堪かん忍にんがが堪かん忍にんをを中ちゆう小せう天てん神しん
 持もちちててごごぶぶるるッッササ。吹き自みづかもも地ぢ彦ひこ堂どうのの祝まつりか法はふでで。後ご長ちやう坊ぼうととか
 言いつつととあありりささ。アアニニ。むむじじ越こ後ごのの韓かん信しんへへ竹たけ田でん真ま言げんと
 戦いくさひひ總そう角かくのの助すけ六むつがが膜まくらととららつつてて千せん人にんのの肩かたをを執ととといいふ
 事ことアアのの通つう俗じやく三さん國こく志し小せう詳じやうとと。理り借じやくのの言げんとと物ものととううとと八はち弟てい
 方かた悪あくもも氣きががあありりままりりとと折をととアア。成なり程ほどあありりがが扱あつかふふららんんが
 るるののががととううるるッッササ。ままんんぢぢアアらられれししふふののむむぶぶののうう。能あた扱あつかふふ
 ささううせせんんととららいいうう。ままがが扱あつかふふままいい六むつ儀ぎ。大おほ夏なつウウ三さん儀ぎ新しん酒しゆ屋やの

田舎草子
 一七

一斗指と添く其よふ医者屋中であらうかける約束
 ごとく。まも知居べし。淡井新田の葦村毒唐根よムラ。
 そのやア大長ぶつけの毒唐根が。毒唐根よア。
 うらが婆根が大病の時頼んごアが。自孫小我折つごアが。
 マア聴て長さうせ入。あふが。うらア婆女さゆも。九十ふある
 年病ごアうら。骨と皮ぶのふまうごアが。かたうご
 うら。危角風長入遠のべい。とらうご。孰の医者屋小
 向ても。湯のせん移ると言うごが。毒唐根よかゝりて又

湯のりやを向たまう。又各別ごア。陸風もようんべいといふ
 うら。急小居風長入。涌くと。漸とア抱へて遠ると。あんごう
 眼をぎうくして介齒べい。喰うら。ごらやアとんごるごアと。
 大さうじぎイをどめて。医者屋さゆぶべいと人をきると。毒
 唐根あふ。あふが。あちつきをうらうてごらうて。皆其の移小あ
 するごア移く。さうあまが来ちやア。若波女もんぢやくが
 身ことあもつら甘くと。ひまがう大肌脱小まうて。婆女さゆの
 腕を握て。手あかして腕さんど。爪又らけ。ごらやアでうく。

日本書紀

一七

うら先筆をぬいて骸の動かぬ振ふ湯をぶんすけろと。
 折角湯と湯をすかすのこまうう剃刀丸をすて角
 逆上がでけろうう。つぶり剃ぐのとあかかろく坊主あしと。
 まううア蓋をさろせ。そこで今まじしん合せてきがつろ
 ざアけ形で浴灌も頭剃もしてあろうう。まうア剃りせ
 と云て優くとゆうさ。後よまうの能くもあるが。あの
 位なへへいとあんりへへみちつの上る医者とりの毒屋
 どのどんべのトをきりてゆへあわごう。甚言持寺のしんく庫裏より
 上層のあかり目のの二十人をり。一はへア。どんもお早るのどちんも
 何うざいくとをばまてある。一はへア。どんもお早るのどちんも

さんちまうア遅かり申と。玄十と後でござるを「後
 後」ア。玄十どん。どういふ物ぞア。まうのあんまりいんべい。
 後後「後」ちくとおまきこるも有言うう。おまき。玄十。
 主「村」でもこ。ぶのくロイ初く者ぞア。答さるよりやア
 早くござるこが能く「村」もア。まういでも来づいと
 思ろアが。昼時かろ。どてり後ア出小食つれと。
 の内容様てみまうア「あ」あよ。ちくべいこぞア。能か藏小

田舎草紙

入るこゝろが半回廊路考とやうゆも。あんまり肩もろく
 中とゆふとぞんどやまご。ツコデ。彼之辰目で千ヨボガム。風
 りてくる柳蔭。その柳より風俗へト借る時。モ。奴と借不
 連て。綿帽子で志よまうくとおかけの婢おかるが。平
 ぞうぞうエ。ころややよかんべい。色かきまて眼がぶくして
 アハ。ちたるさる。只今あまこのゆとやま。彼
 是とゆら色中。私が色かきまて。おかるへ出まほ
 移へ。返言ぶく。甘んぢたるん。サア。おかるりま

世サ。トキニ。鉄村の鉄翁どんのどうとエ。ハイ。じも坊く
 お願がござりやま。おのるでも移へ。先之辰目あさ。風が
 持ある柳げ。其柳より風俗へト。奴と借ふれて。
 綿帽子かぶらて志よまうくとおける。婢おかるが。じ
 ころござりやま。鉄翁さん。おかりまが。今もお聴の
 通。おかる日と換。そてマア肝がでんぐり返る子。
 主が教であるもおしるんべい。まよりるまが。お
 おおる坂伴内でもまがるがよかんべい。け野郎もエ

田舎

野方圖まるべいのぬるまをアがるが。格うさたア何ふろ格うさ。
お辞塔さるううでも云付うさ。け釋飯せ帯めエ「あんど。
野郎ごアと。イヤ反吐があふア。け玄十。村内でも一たん家の
吉のち陰めやア。あふが有ても上座の玄十げん阿吉
田のちたふどのが寝お睡てござるけども。うらが爺さあ
うらうらうらどの續てけ村内の長をうらう者ごア。あや
どのがうらうこお付てちたふどのが軍配ふるけども今中
えんさろせんちたふらあが身かふ也程の千奉。ひよんうら

眼をらん移ぶらてえんましま玄十げん「こまじぢやア
とよ。けちたふらが因縁らん移ぶらウ待居るごア子。扱な
んのおまじりい男がごまじ「イヤうらでまねが。悪くまらるま
んま。まが又あふまらうら。うらが親父いな命ご
ばら等小羽をうたもさるえん移入「ヤレ養も移入。
けんまらへまエ寝でらみおでまごごん移入「あうら
あかるあ格さるせん「其のサ。あうるのひごうけ玄十。後
づくでもはてえんせん「けん「ア大笑ごあふせうらう。

因舎せま居

上十三

ノコテ。第^二時イ大^一クイ^二あて。ワハ^三ハ^四と^五の^六笑^七の^八り^九情^十つ
 目^一。あ^二ん^三で^四も^五あ^六じ^七く^八ま^九つ^十ら^一。口^二の^三く^四ま^五あ^六て^七。あ^八り^九つ
 う^一け^二ほ^三い^四ま^五わ^六め^七て^八第^九の^十旅^一ま^二づ^三一^四を^五り^六い^七そ^八ん^九で^十う^一ト。
 扱^二皆^三さ^四ゆ^五お^六聴^七の^八通^九り。お^一か^二る^三の^四強^五ぎ^六が^七出^八来^九す^十。志^一は
 何^二の^三村^四で^五も^六担^七言^八を^九が^十女^一形^二が^三拂^四底^五を^六ど^七う^八を^九く^十ま^一る^二が^三け^四村
 ぢ^一や^二ア^三忠^四臣^五義^六と^七ら^八よ^九り^十早^一く。お^二か^三る^四べ^五い^六二^七人^八り^九ま^十で^一出^二来^三
 ち^一が^二。他^三村^四へ^五の^六ま^七え^八も^九旅^十ち^一よ^二お^三ぢ^四や^五ら^六う^七ら^八。中^九よ^十く^一二^二人^三り
 で^一ま^二る^三が^四よ^五う^六ん^七べ^八い。對^九の^十衣^一裳^二を^三ど^四ち^五く^六ま^七す。仕^八務^九を^十志^一し

勢^一平^二が^三ち^四ろ^五と^六強^七義^八を^九ん^十べ^一い^二け^三ま^四ど^五も^六い^七ぎ^八や^九で^十よ^一う^二ん
 づ^一い。あ^二ん^三で^四も^五同^六ま^七ま^八づ^九ら^十い^一る^二い^三ら^四う^五が^六。そ^七る^八ア^九子^十の^一答^二ま^三る^四さ。
 「あ^一る^二わ^三ど^四強^五由^六あ^七の^八ま^九づ^十ま^一ん^二づ^三ら^四中^五よ^六く^七あ^八ん^九で^十勤
 中^一ま^二づ^三い^四「モ^五。あ^六ら^七で^八流^九文^十さ^一ら^二ら^三せ^四。平^五形^六を^七押^八ま^九す
 づ^一い^二ら^三「あ^四あ^五さ^六ま^七あ^八も^九及^十を^一編^二入^三る^四で^五ぞ^六ら^七る^八「強^九ぢ^十や^一ア^二モ^三。
 檀^一那^二寺^三修^四護^五の^六禮^七履^八を^九結^十る^一や^二う^三ん^四べ^五い^六「よ^七う^八ご^九ま^十る^一中
 よ^一く^二志^三ま^四ま^五づ^六い^七「ま^八ら^九う^十さ^一く。ト^二キ^三ニ^四は^五既^六坂^七の^八祝^九め^十ど^一ん^二の
 ぢ^一う^二づ^三子^四「い^五。こ^六う^七の^八其^九三^十段^一目^二の内^三で^四。ち^五く^六と^七の^八ぞ^九ま^十か

日本書紀

一四一

さあが仕づのとさかすも。あの舞り廻中へ吹聴して。
 立合の上極さふんぞやう。是れさういふ事なり。四
 段目まで幸抱まう。申一割抱する申後。こきなる
 主か一人であやくなる。アめん。サ。達て四の五の
 ぶ。うらアまゐりて幕のあう移入内う。外へ立て
 居る。一あてても移入む。其上やア初舞臺と
 くら。文句もあきり。ゆりり執事古の出あるは段目
 お出さる。一テ文句があきり移入け。はう。はう。

下入る。てのけづのさ。そさぢやア。この舞臺アハテ
 こまう。と物さ。と段目お出さる。さう。ようんべい。
 其代ア。は段目ぢやア。かあ。よは。おものさ。踊ら
 聴ん。さう。さる。が。能さ。ナ。ト。と段目。お出さる。と。舞臺
 お出さる。と。舞臺。お出さる。と。舞臺。お出さる。と。舞臺
 こく。さる。さる。と。舞臺。お出さる。と。舞臺。お出さる。と。舞臺
 馬の尻をさ。と。舞臺。お出さる。と。舞臺。お出さる。と。舞臺
 う。と。舞臺。お出さる。と。舞臺。お出さる。と。舞臺。お出さる。と。舞臺

鐘の文句ウらぶづの「たのこべいさうしんま。ハテ師出が
 引込む西ア「師出のうらふ構と縁を不逆さ
 能くハテ悪い呑込さ。師出の逆も口うが道具が
 起りて表門ふさるのし能う子。そそ入幼卒とおかるが
 出て来づのい。まうもおかるのこ人まで出てあるごめを
 「そのやア。あかるが百人出づの。幼卒が千人出づの。
 うらア貪惜ア移入魚づじの空間の鐘が悪う。あふ文の
 前萱う山椒をまでもかるべのい「ハテ呑込この口う

るづ。そそぢやア狂言が出来移入「あたるるまの
 口うの「男がごとくさ。あめうらぶの「男が。幼卒や
 あかるが狂まが出来移入。うらも長上下でほら
 けりて。喰喰くとべのまぢやア狂まが出来移入サ「其
 うらうらうの「辰目のかあよゆあでサ。あふ文をぶら出さ
 とも先陣同書どがあらるとも。うらうらう好三時ふらう
 うらやアあまらう。うらうらう是非が移入。ハテ大名級ごら
 までもはまがべのい。其代は辰目ぢやア。かあよゆあ

